

---

# 閃光の王

秀泉今友

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

閃光の王

### 【Nコード】

N7966W

### 【作者名】

秀泉今友

### 【あらすじ】

超能力者であることを隠しながら生活する俺（御手洗光輝）の前にキツチン、アトリエ、カンパニーという三つの超能力者集団からの刺客が現れた。彼らは俺の能力を『超能力者が分かる能力』だと思いついていて、俺の手で勧誘してくる。

そんな最弱能力者を中心とした超能力系ファンタジー（になる予定です）。

## 閃光の王（1）（前書き）

この物語はフィクションです。

投稿スピードは遅く、一ページあたりの文字数は少ないです。  
新参者なので暗黙の了解や改善点などがあつたら教えてください。  
誤字脱字などを見つけたら教えてください。

（追記）

視点が変わるときはサブタイトルも変わります。

## 閃光の王（1）

『天使』と言う言葉すら侮辱に値するほど綺麗な少女だった。黒と言つより漆黒色の髪は地面に着きそうなほど長く、透き通るような白い肌を強調している。

月光がスポットライトのように照らし出したその少女は、床に転がる異形の塊を拾いあげると、一欠片の悪意も感じさせない、柔らかな笑みを浮かべた。

「あと何回殺したら死ぬる？」

天使の微笑みよりも純粹な笑顔で、悪魔の囁きよりも恐ろしい台詞を口にした少女に、俺は心を奪われていた。

まだ太陽が完全に沈みきる前、帰宅ラッシュでもみくちやにされ、くたびれた学生達をしり目に、入り口で不良がたむろしているコンビニに入った。気の抜ける電子音が、貸し切り状態の店内にむなしく響き、吸い込まれて消える。

目当ての弁当と飲料を買い物カゴに落とし込み、特に目的もなく携帯電話をいじりながらレジに立つと、「あれ？」と店員が声を発した。その声につられて顔を上げると、どこか見覚えのある人物がそこに立っている。

「やっぱり。御手洗<sup>みたらい</sup>くんだよね？」

そう言われても、いまいちピンと来ないので、胸ポケットに安全ピンで留められている名札を盗み見て、「天草あまぐささん？」さも思い出したかのような口調で言うと、彼女は嬉しそうな笑顔を見せた。

「覚えててくれてありがとう。紫楼むらでいいよ」

ああ、と思わず手を打ちそうになるのをどうにか堪える。そうだが彼女は同じクラスの天草紫楼だ。同じクラス、と言っても、まだ数日しか顔を合わせたことが無いのだから、思い出すのに時間がかかっても仕方のない事だろう。

「私がここでバイトしてるってことは誰にも言わないでね？」

罪悪感から逃れるための適当な言い訳を考えていると、店内に俺以外の客がいなかったためか、紫楼さんは再び話しかけてきた。

「俺は声をかけられるまで紫楼さんがバイトをしてることを知らなかったけど？」

「冗談めかしてそう言つと、彼女は胸の前で手を慌しく振り顔を赤く染める。」

「いやほら、知り合いを見かけたら思わず声をかけたくならない？」

早口で捲くし立てるその姿は小動物を彷彿させるため、見ていて飽きないが、いつまでも雑談しているわけにもいかないの、「それより」と言つて視線を下にずらし、会話を断ち切る。

「あ、ごめん、御手洗くんはお客さんだったね」

苦笑しながらも、慣れた手付きでバーコードを読み取り、商品を袋に詰める。それが終わるとほぼ同時に「あの」電子音が鳴り、数名の客が入ってきた。

紫楼さんは「また明日」と俺にだけ聞こえるように小声で言うと、「ありがとうございます。またお越しください」と会話の時はわずかに音程の違う声で、定型文を口にした。

## 閃光の王（2）

「よお」役目を果たそうと懸命に明滅めいめつする街灯に寂しさを感じていると、脇道から現れた黒猫が話しかけてきた。それを異常と思えない辺りに、俺も異常なのだなあ、と感慨をもよおす。

初めて出会った一年前と比べると少し丸くなっているが、彼は以前と変わらず軽々と塀の上に飛び乗り、大きなあくびと伸びをする、その場に腰を下ろし、「いい情報と悪い情報があるんだか買わないか？」と言った。

彼は各家庭のお財布事情から、暴力団の抗争の日程までと、ありとあらゆる情報を金に換えるため、情報屋と呼ばれている。情報は購入する意思を伝えるまでは、大雑把な内容までしか分からないが、売る相手はきちんと選ぶので、買って損をすることはまず無い。

「いくらだ？」

ただし俺にとって有益な情報は、学生という身分からすれば高額で、親戚からの仕送りで暮らしている今の状況では、食費と光熱費、衣類や文房具などの、必要最低限の物にしか出費していなくとも、月に一度が限界だ。彼もそれが分かっているのか、月に一度しか姿を現さない。

「今回の十万は貰わないとだな」胸を張ってそう言う。「いつもの口座に頼むよ」

「わかった」

「じゃあまずは悪い情報からだ。」はっとして顔を上げると彼は、にやりと笑っていた。「ふっ飛んだろ？」

「詳しく聞かせろ」睨むように彼の目を見る。瞳に反射して映った俺の顔は笑っていた。

「お前さんの学校の近くに廃墟があるだろ？ 最近そこに幽霊が出るって噂が流れてるんで調べてみたら、お前さんが言ってた特徴にそっくりの男がいた」

「学校の近くの廃墟だよな？」確認のためにそう問う。

「ああ」

彼が首肯したのを見て俺は歩き出した。

廃墟に着くと、額にはうっすらと汗が浮かんでいた。それで無意識のうちに駆け足になっていたことを思い出す。

携帯電話で時間を確認すると午後十一時だった。うっそうと生い茂っている雑草を掻き分けながら進み、立ち入り禁止の看板を無視して金網をよじ登り、暗さのせいで足元に何があるか分からないので、逸る気持ちを抑えて慎重に降りる。

人目を忍ぶように中腰で移動し、中途半端に開かれたドアから中を覗くと、真っ暗で何も見えなかったため、再び携帯電話を取り出して床を照らす。うっすらと積もった埃の中に真新しい足跡を見つけて、声を出さずに笑う。



ぎい、と小さくドアが悲鳴を上げた。足跡は奥まで続いている。この中にあの男がいるかもしれない、そう考えると自然に、呼吸が浅く速くなり、鼓動は大きく遅くなる。

ドアに行き当たった。掌てのひらに滲しみんだ汗をズボンで拭う。腕全体が震えて掴んだドアノブがガチガチと音を立てる。武者震むしゃぶるいだ、と自分に言い聞かせるように呟つぶやきドアを開ける。

まず目に入ったのは赤い水溜りだった。畳で三十畳ほどの広さの部屋を埋め尽くすほどの。鉄錆てつさびの臭いに眉まゆを顰しかめつつ視線を上げると、一人の少女が目に入った。地面に着きそうなほど長く、薄暗い中でもはつきりと判る漆黒色の髪が穏やかな風に揺らぐ。肌は色素が抜け落ちたのかと思うほど白い。その少女は赤い水に髪が濡れるのも気にせずにしゃがみ、床に転がる「それ」を拾いあげた。「それ」から赤い液体が滴したたり落ちる。手の震えは止まったが、嫌な汗が背中を流れた。両手で支えている「それ」の角度を少し変えて、少女がニコリと微笑んだ。

「あと何回殺したら死ねる？」

鈴を振るような透き通った声が聞こえ、それと同時に誰かがうめき声を上げた。いつか聞いた、死の恐怖に怯おびえる声によく似たものだったので、思わず肩がビクツと跳ね上がる。視線を少女から、少女の持つ「それ」に向ける。目を凝こらさないと判らないが、「それ」からは頭髪を思わせる毛が生えていた。

突然、少女が「それ」をこちらに向けて投げた。壁にぶつかり、ぐちゃ、とトマトを潰したような音をたて、床を転がり、「目が合った」。

「ツーーーー!?」

悲鳴を上げたかったが、喉が引き攣り声にならない。

体を無くした誰かは声を出さずに口を動かした。読唇術どくしんじゆつなんて使えなくとも、彼が言いたいことは分かる。『たすけて』と伝えようとしているのだ。

それを目にして、頭の中で火花が散った。そう錯覚させられる。過去の、思い出したくもない光景が、脳内で鮮明に描き出されてゆく。

「あ  
」

自分でも聞き取れないほど小さな声が出て、困惑と恐怖が頭の中を埋め尽くす。

「ああ  
」

決壊するダムのように徐々に勢いを増しながら、それは声となつて出て行く。

「ああ  
」

傷口が開いた。

「あああああああああああつっつ!!」

喉が震えるほどの大声で叫びながら走った。足を縛きつれさせて何度

転んでも、止まらず走る。どこをどう通ったのかは覚えていないが、家に着いた俺は嚴重に戸締りをして、布団に包まっても震えが止まらず、部屋の隅で膝ひざを抱えながら朝を迎えた。

### 閃光の王(3)

もしかしたらあの少女は、俺の顔を見ていないのでは、と思い始めたのは、友人に目の下に深く刻まれたくまを指摘された時だ。よくよく考えてみれば、少女は明るいとどこにいて、俺は暗がりから覗くようにしていたのだから見えるはずがない。そう考えると途端に、張り詰めていた緊張感が緩み、帰宅直後にベッドに倒れるように寝転がり、十二時間もの間眠り続けた。

それから一週間、ついに少女は現れず、あの日の出来事は数学の公式や英単語などにより、記憶の片隅に追いやられた。情報屋から買った情報の内容も、首だけの男の顔も、少女の顔すらも。

事態が動き出しているのを認識したのは、つまり、俺があの日のことを思い出せたのは、五月の中旬の月曜日になる。忘れようにも忘れられなくなったその日は、嫌味なほど澄み切った快晴だった。

「転校生を紹介する」きょうだん教壇の上に立つ担任の小林が、左手に持った出席簿で肩を叩きながら言った。今年で四十になる彼は、ハードワックスで髪を無理やり後ろに撫なでつけて、教育者と言っよりギャンブラーと言った方が信憑性しんぴやうせいのある風貌ふうぼうをしている。一部の女子には「渋くてかっこいい」と人気がある。

こんな中途半端な時期に増えたクラスメイトの性別、容姿に思いを馳はせてざわめく教室を、小林が軽く教卓をはたいて静める。全員てんまやしきしずかの視線を集めると、満足気に頷いて、黒板に文字を書き始めた。『天満屋敷静香』てんまやしきしずかそう書かれた瞬間、男子の歓声かんせいが上がり、今度はや

や強めに教卓が叩かれる。

「入っていいぞ」一拍置いて前のドアがスライドし、一番後ろの席に座る俺にも足音が聞こえるほど静かになる。

彼女はまっすぐ前を見て一定のリズムで歩き、教卓の前に立つと、軽くお辞儀をしてクラス全体を見回し、微笑みを浮かべた。

「天満屋敷静香です」鈴を振るような透き通った声が教室に響く。男子は当然のこと、数人の女子も息を飲んだ。

「あー、天満屋敷は両親の仕事の都合でこんな時期に転校して来た。最初は戸惑うことも多いだろうからみんなでサポートしてやってくれ」席は、と語尾を伸ばしながら教室を見回す。俺と目が合った。「御手洗、お前の横空してるだろ？ 隣の空き教室から机持ってきていい」

男子から羨望せんぼうと恨みの混ざった視線を受けて、追い出されるように教室を出ると、後ろから足音が着いてきた。

「私も手伝います」ニコニコと柔らかな笑顔で天満屋敷さんは言った。短めの髪が彼女の歩調に合わせて弾む。「下の名前はなんて言っんですか？」

「光輝だよ。ひかりかがやく、と書いて光輝」初対面の相手と話すのはあまり得意ではないため少し無愛想になってしまう。

反省と、少しだけ後悔をしながら、ドアを開けて、手近な机を指差す。「これでいいかな？」そう訪ねると小さく頷き「はい」と明るく返事をしてきた。

椅子を机の上に乗せ、抱えるように持ち上げると横から制服の袖を掴ままれ、静止させられる。「手伝います」

「あんまり重くないから俺一人で運ぶよ」

「手伝わせてください」

何度か押し問答を繰り返した結果、大して重くない机と椅子を、二人で協力して教室まで運ぶことになり、運び終えるのとはほぼ同時に始業のチャイムが鳴り響いた。

転校初日で、教科書の準備が間に合わなかったらしい天満屋敷さんは、俺と一つの教科書を二人で見ると。当然、クラスの男子からは非難の眼差しを浴びせられる。それが午前中だけで四回もあったのだから昼休みと同時に盛大なため息が出たのも仕方ないだろう。

「あの」と、天満屋敷さんが机に突っ伏す俺の肩を、遠慮気味に突いた。「よろしければ一緒にお昼を食べませんか？」

なんで俺？

## 閃光の王(4)

「やっぱり屋上でのお弁当はおいしいですね」四階建ての校舎の屋上で俺は、天満屋敷さんと向かい合いながら昼食を摂っていた。普段は転落事故防止のために閉まっているはずの屋上が、何故か開放されていたことを不思議に思いながらも、一方で二人っきりで会話できる機会を得られた幸運を素直に喜ぶ。

「あのさ」いつまでもタイミングを計っていると、昼休みが終わってしまつので、そう切り出す。「回りくどいのは無しにしよう」

「何のことですか？」天満屋敷さんは、全く持って訳が分からないう、といった表情で言った。それが、とても演技をしているようには見えなかつたので、思い切って聞いてみる。

「君も超能力者なんだろう？」

瞬間、喉元に衝撃が走った。地面に押し付けられ、じわじわと頭に血が集まる。いったい何が起こつたのかと考えて、目だけで確認し、ああやっぱりか、と思った。

「誰から聞いたんですか」先ほどまでとは打って変わった感情を感じさせない声に、背筋が粟立つ。「あわた答えてください」

答えようにも、首を締め付けられたままではうめくことしかできず、ようやくそのことに気付いた天満屋敷さんは、俺の首から手を離し、マウントポジションを取る。息苦しさから解放されて、盛大に咽むせた。

「悪いけど、答えられない」

小さな拳が鼻に叩きつけられ、どろどろとした鼻血が頬を伝って地面を濡らす。「答えて」再度、冷たい声で言われた。無言のまま数秒が経つと、鼻に激痛が走り、そして同じ質問をされる。

それは痛覚が鈍くなるほど繰り返された。

「いい加減答えてくださいよ」丁寧語で天満屋敷さんは拳を降り下ろす。鼻の骨が折られて、右に傾いているのが、なんだか滑稽こっけいに思えて、ふへ、と笑いがこぼれた。それが氣にくわなかったのか、再び鼻を殴られる。「ずいぶん余裕ですね」

痛いには慣れないが、こういった場面には慣れていたので、俺は大物ぶって真っ直ぐに天満屋敷さんを見据みすえる。口の中に広がる鉄の味がする液体を飲み下し、ニヤリと口元を歪ゆがめる。

「物を、見えなく、する力」鼻で息をすることができないため、歯切れの悪くなったその台詞は、天満屋敷さんの拳を止めるには十分だった。

「君はさ」鼻詰まりの時のような、聞き取り難い声で続ける。「自分の能力が、バレるはずがないって、心のどこかで、思っていたんだろう？」一度大きく息を吸い込み、睨み付ける。「自惚つめぼれてんじゃねーよ」

凶星をつかれて、頭に血が上らないはずもなく、怒りと羞恥に顔を染めた天満屋敷さんは、止めていた拳を放つと、どこかへ走り去って行った。



午後の授業で、俺の隣、天満屋敷さんの席は空席だった。

## 閃光の王（5）

放課後になると俺は、部活動などに参加していないので、そそくさと帰り仕度を整えてから教室を後にした。そのまま昇降口に向かい、下駄箱を開ける。

「何だこれ？」誰に訊ねるわけでもなく、反射的に言う。靴の上になんかが乗っていた。手紙だ。実際はただのルーズリーフなのだがこれは、授業中に女子が回す物と同じように畳まれているため、そうだと確信した。あて先も差出人も書かれていないが、下駄箱に入られているのだから俺宛てで間違いないだろう。がさがさと音を鳴らしながら手紙を開ける。

「屋上にて待つ」

最初の感想は、達筆だなあ。次に、もう少し大きく書けばいいのに。最後に、いつから待っているんだろう、だ。短くため息を吐き、下駄箱を閉じて屋上に向かう。

「やあ」屋上に繋がるドアのある、階段の踊場おどりばに、天満屋敷さんはいた。もしかしたら、いや、絶対に彼女が手紙の差出人だ。「待った？」

聞きたいことが色々あった。だから警戒心を抱いだかせないように、出来るだけ軽い口調で話しかけ、柔らかな表情を意識する。しかし天満屋敷さんは無表情で俺を見つめてきた。さながら氷の彫像うしなまがのよううに。

「その鼻、もう治っているんじゃないですか？」

唐突に、凶星をつかれて表情が固まってしまふ。柔らかい表情が固まるというのも変な言い回しだが、そうとしか言いようのない表情になる。

「たかだか二時間程度で骨折が治るとでも？」 平静を装いながら嘘を吐くのは、なかなか精神的に疲弊する。きつと俺は尋問されたら五分と持たないだろう、と関係のない考えが頭を過ぎった。「マングじゃないんだから」

「不可能を可能にするのが超能力ですよ」

昼までの明るさを全く感じさせない、機械音声のように淡々と語る。余裕があるのだろう。呼び出しておいて、後ろから襲撃されるくらいのことは覚悟していたのだが、取り越し苦労だったようだ。

「あなたの能力について、知っている者は誰もいない」

確信を持って彼女は言った。午後の授業を受けている間に、色々調べてきたのだろう。それこそ、草の根を分けて捜すように。

「つまり、戦闘では役に立たない能力」また凶星だ。「しかしあなたは『水害』を捕縛して見せた」

ずいぶん懐かしい話を知っているな、と感心せざるを得ない。確かに俺は以前、『水害』と呼ばれる超能力者を捕縛し、その身柄を情報屋に明け渡したことがある。幸い、能力がばれることは無かったが、一部の人間に名前を知られてしまった。だから最近はあまり

派手な動きをせずにしたというのに。「何のこと？」俺は空とぼけた。

「つまり、あなたには味方がいる」俺の言葉など聞こえなかったかのように続ける。心なしか、彼女の声には熱がこもり始めてきた。「それも二人以上。おそらく一人は戦闘向きで、もう一人は治療系統」

そこで一呼吸挟み、「ガーゼを取ってください」と天満屋敷さんは言った。断ると再び拳が襲い掛かってくる恐れがあるので、指示に従いガーゼを外す。一日に二度も骨折を経験したいと思うような変わった趣味は持ち合わせていない。

「やっぱり」自分の推理が正しかったことがよっぽど嬉しいのか、少しだけ表情が緩んだ。

折れていたはずの鼻はまっすぐ前を向き、外傷はおろか、内出血の一つもない。

「わたしが記憶している中で、治療系統の能力者が所属しているのは『アトリエ』だけ」

「君は、自分の推理の正確さを確かめる、という自己満足のためだけに俺を呼び出したの？」得意気に話し続ける彼女に対して、若干ながらの苛立ちを覚えたため、結論を言おうと息継ぎをした、まさにそのタイミングで俺は声を発した。そもそもが、こんなに人の集まる場所ではない話ではない。もし誰かに聞かれたらどうするつもりなのだ、と彼女の言動に呆れる。「まさか違うよね？」大げさに肩をすくめてみせると、むっと一瞬、眉をひそめた。

「単刀直入に言わせてもらいますね」天満屋敷さんの表情は、氷のように冷たい物でもなければ、「冗談を言っている風でもない。真剣な眼差しで、心の奥底を覗き込んでくるような、そう言った物だ。だが、彼女の口からは冗談としか思えないような言葉が発せられた。

「あなたが欲しい」

俺が呆気にとられて、口を半開きにしたまま、何度も瞬きを<sup>まはた</sup>してると、不審に思った天満屋敷さんは少しの間考えて、ハツとし、赤面した。手と表情を慌しく<sup>あわただ</sup>動かして、何度も口を開閉しながら、なにやら言外語を発している。表現するならば、あわわ、といった具合の。

それを見て、彼女のセリフの真意に気付いたが、少しからかってやろう、と悪戯心に火が着いた。「そういうのはもう少し、お互いのことを知ってからじゃないかな」若干うつむいて、表情を見られないようにする。

「ち、違いますっ！ 私が欲しいのはあなたの体だけで」「着実に墓穴を掘り進めて行く天満屋敷さんの揚げ足を取るため、言葉を言い終わる前に割り込む。「そ、そんな関係は不純だよっ」

「ツ~~~~~!!」横目で見ただけだが、耳まで真っ赤になっていた。すこしやりすぎたか、と反省していると天満屋敷さんが声を張り上げた。「<sup>なから</sup>半さん!!」

半、とは誰のことだろう。少なくとも俺の知り合いにそんな名前の人物はいなかったはずだ。

「これで僕との会話の重要性に気付いてもらえたかな？」

突然の、後ろからの声に慌あわてて振り返る。しかし、そこには誰もいない。

「いざという時に最適な言葉を選ぶ練習になる」右を見るが、やはりそこには誰もいなかった。「そもそも天満屋敷君は感情的になりやすいのだから、誰よりもその必要があるんだよ？」あえて声のした方と逆を見ても、その姿を捉えることはできない。

「そう口が酸っぱくなるほど言っているよね？」上を見ても、「口が酸っぱくなる、と言っても慣用句としてだよ？ 実際には酸っぱくならない」下を見ても、誰もいない。

「わかりましたよ」ため息混じりに天満屋敷さんが言うと、突然、目の前が真っ暗になった。といっても、気を失った訳ではない。その証拠に「本当に？」という男の声が聞こえた。

「わ、か、り、ま、し、た」一音ずつ強調された、苛立ったような声が聞こえた。そこでようやく、目隠しをされていることに気が付き、異様に硬い結び目に手こずりながらも、どうにか外す。外して、目を疑った。

数秒間目を瞑つぶっていた間に、辺りには何もなくなっていたのだ。本当に何一つ無かった。階段も、蛍光灯も、窓も、ドアも、色すらも無い、白一色の部屋にいた。

「さて、話をしようか」

先ほどの声と同じ声を発する男が、怪しく微笑んだ。

## 閃光の王（6）

唐突に思い出したのだが、今朝、なにげなく見た星座占いで、俺の運勢は一位だった。それだというのに転校生に鼻の骨を折られ、見知らぬ男に謎の部屋に拉致されている。

これはどういうことだ。単に占いが外れたのか、それとも、一位ではなかったらもつとひどい目にあっていたのか。とにかく、ラッキーアイテムまで持ってきたのが馬鹿らしく思えてきた。なんだよ、かんしゃく玉って。

「いったいどこから話せばいいのやら」

俺がどうでもいいことに頭を巡らせていると、半が唸るように呟いた。これは話しが長くなるぞ。直感ではなく、確信する。経験だ。こういった場面では、ほぼ確実に長々と話しを聞かされる。自習の時の体育教師の自慢話しかり、夏休み明けの校長しかり、話しをする前に「あれは高校三年の」や「数日前のことですが」などの、過去の話を臭わせる前置きをする人間の話しは、九割九分長くなる。

「あの、バイトがあるので、なるべく早く早く済ませてもらえますか」嘘ではない。が、別に急ぐ必要もない。遅刻をしたところで給料に影響はないし、店長もどうせ寝ているのだから怒られない。単に話を聞くのが面倒だったのだ。

「ふむ、では単刀直入に言わせてもらおうよ」そこでいったん区切ると、眼鏡の位置を直して、キツネのように細められている目を、片方だけ開き、「きみ、キッチンに入らないか」

「キッチン？ 料理はあまり得意じゃないんですけど」

「む、そろそろ知名度は上がってきたと思っていたのだが、どうやらそうでもないようだね」半はそう言う自嘲気味な笑みをこぼした。「僕の言うキッチンとは厨房のことではなくて、超能力者集団としてのキッチンのことだよ」

超能力者集団とは、読んで字の如く、超能力者の集団のことだ。かつては『ピース』と呼ばれる一般人と超能力者の共存を目標とする組織だけだったのだが、今では無数の組織が存在している。有名所では『カンパニー』と『アトリエ』だ。どちらも目標は超能力者の立場改善なのだが、その方法が大きく異なる。『カンパニー』は対話により理解を深め合おうとしたのだが、『アトリエ』は強硬派、とでも言うべきか、目標達成のためには殺人すらも良しとしている。実際に超能力者を排斥しようとした政府要人が何人も殺されている。と以前情報屋が言っていたのを思い出した。なんでも組織名は創設者の能力に関係しているそうだ。

「それで、どうして俺を勧誘しようと思ったんですか」

「うん、君の能力、『能力を見抜く能力』が欲しいんだ」数分振りに呆気にとられた。やはり半も、冗談を言っている風ではない。

「どうしてそれを、とでも言いたげな顔だね」

違う。この顔は、どうしてそんな勘違いをしているんだ、の顔だと声を大にして言っただけだったが、そんなこと言える雰囲気ではなかった。黙って半の次の言葉を待つ。

「詳しい話はその内天満屋敷くんから伝えてもらうことにして、考えておいてもらえるかな？」



これ以上ないほどの肩透かしを食らわされ脱力する。「入団するかを、ですか？」

半がゆっくりと、首を縦に振ったのを見てから、「わかりました」ため息混じりにそう言う。

突然、真っ白な部屋から学校に景色が移り変わった。半が能力を使ったためだ。テレビのチャンネルを切り替えたようだ、と思うと、なんだか可笑しい。

少し目を放した際に、太陽はすっかり傾いてしまい、山の辺りに昼と夜の境目が見える。

視線をめぐらせると、ずっと待っていたのだろう、天満屋敷さんが階段に腰掛けて退屈そうにしていた。指を絡ませてかえるを作り、「けるける」と言いながら遊んでいる姿は、とてもじゃないが同学年には見えない。

半が、ぷっ、と笑いを堪えきれずに噴き出したため、天満屋敷さんがこちらの存在に気付き、顔を真っ赤にした。「いつ、いつからそこに！」驚きのあまり、声はわななき、髪の毛は静電気を帯びたように広がっている。半はその様子を見て、さらに大きく肩を震わせた。

「俺はこれからバイトなので後のことは任せます」

待つて、という天満屋敷さんの懇願にも似た叫びは聞こえなかったことにしよう。

## 閃光の王（7）

駅から徒歩十二分と、近くもなく遠くもない場所に位置する、綺麗でもなければ汚くもない六階建ての雑居ビルの三階、「なんでもこい屋！」の看板を掲<sup>かか</sup>げているところが、俺のバイト先だ。さすがに仕送りだけでは心もとないので情報屋に頼んで紹介してもらい、二週間前から働き始めた。年中無休と書かれてはいるが、夜九時から朝十時までは、たとえ相手がお得意さまでも一切応じない。そのことをいくら指摘しても、「誰も文句を言ってこないから大丈夫ジャロ」笑えない冗談を笑顔で言ってくるものだから対応に困る。

鉄製のドアを三回ノックしてから、「こんにちは、御手洗です」言っ<sup>て</sup>、返事を待たずに開ける。案の定、店長は眠<sup>つ</sup>っていた。机に覆い被<sup>さ</sup>るようにしているので、初めてこの姿を見た時は、ひやりとさせられたが、今ではすっかり見慣れてしまい、むしろ起きていた時に違和感を覚えるようになっていく。

窓辺に、昨日まではなかったプリンターが置かれていた。こんな店にも一応、客は来てるんだな、ほんやりとそう思う。

「よし」スイッチを切り替えるために言っ<sup>て</sup>、カバンを置き、袖を捲<sup>ま</sup>くる。ここでの俺の仕事は、まずコーヒ<sup>ー</sup>を淹<sup>い</sup>れることに始まる。店長は、どんなに騒いでも揺すっても絶対に起きないが、何故かコーヒ<sup>ー</sup>の匂<sup>か</sup>いを嗅<sup>か</sup>ぐと目を覚<sup>ま</sup>す。コーヒ<sup>ー</sup>の匂<sup>か</sup>いが好きなのだそう<sup>だ</sup>。が、一滴たりとも口にはしない。

ピーーツ、というやかましいヤカンの音にも、やはり店長を起<sup>こ</sup>すことは出来<sup>な</sup>かった。カップにドリツパーをセツトし、そこにお湯を注ぎ込む。淹<sup>い</sup>れてから数分もしない内に、がさり、と音がした。

「なんだ御手洗」あくびを隠そうともせず大口を開け、店長が起き上がる。「来てたのか」

「店長、目やにと寝癖が大変なことになってますよ」

「直してもどうせまたできるから」いかにも寝起きの、のんびりとした口調で話しながら、手の甲で目元をこすり、ほとんど閉じていた目を半分まで開く。「気にしない」

「なるほど、掃除しても、どうせまた散らかるから気にしないんですね」

あたりを見回すと、店長は首を左右に振った。「これは、散らかっているんじゃないくて、機能的に散らかしている」その証拠に何がどこにあるかはきちんと把握している、とあくびに乗せ、妙に間延びした声で言う。

「能力を使わずに、ですか？」

「それは無理」

「だと思いましたよ」

カップをぐつと傾けて、中身を一気に飲み干し、シンクに置く。適度な温度まで冷めていたそれは、なかなか美味い。満足して頷いていると店長が、数ヶ月間放置した炊飯器の中を見たときと同じような目で見えてきているので、その理由を訊ねると、「そんな毒々しい液体を飲むなんて」信じられない、とでも言いたげだ。「そういえば君は緑色の炭酸飲料もよく飲んでるよね。人間蠱毒こあくにでもなり

たいの?」ピンク色の炭酸飲料を飲んでいる人にここまで言われると、苛立たずにはいられない。

「それじゃあ店長は、毒の臭いが好きってことになりますね」

「毒って言うのは、毒っぽい臭いじゃないんだよ」毒っぽい臭いつてどんな臭いだよ。喉元まで出かかったその言葉を飲み込む。「青酸カリだってアーモンドの匂いに似ているだろう?」頭が冴えてきたのか、はきはきと話し出した。相変わらず目は半分閉じているが。

「俺には店長の基準が分かりません」

「保存料と着色料が入ってたならアウトかな?」

「店長がよく飲んでるそれ、着色料入ってますよ?」

「天然着色料だからセーフ」

「保存料も入ってますよ?」

「安息香酸ナトリウムだからセーフ」  
あんそくこうじゅうひん

やっぱり俺には、店長の基準が分からない。

## 閃光の王（8）

結局、この日は一人も客が来なかった。いや、この日『も』だ。二週間働いているが、直接客を見たことは一度も無い。「君には貧乏神でも憑いているんじゃないか？」お客さん来ませんね、と呟いたところ、店長がため息混じりに答えた。どうやら俺が来ている時に限って客足が途絶えるようだ。時間が問題なのでは、と思ったが、そうではないらしい。「でも、君がいるときは困ってる人が居なくなるわけだから、いい神様かもね」見事なまでのアメとムチだ。

定時にセットしたアラームが、バイトの終了を告げる。

「御手洗」呼び止められて振り返ると、店長は今にも眠りに落ちそうで、<sup>まぶた</sup>瞼を薄く開閉している。「寄り道せずに、まっすぐ、帰れ」それだけ言うと、電池が切れたかのように、がっくりとうなだれた。言動から察するに、能力を使ったのだろう。予知能力。便利で強力な力だが、未来を大きく変えようとする、と、代償として今のよう<sup>う</sup>に強制的な休眠状態に陥るらしい。

店長を椅子から抱え起こし、ソファーに寝かせ、毛布をかける。俺に注意を促すために代償を払った店長を、そのまましておくのは、良心が咎めるからだ。

念のためにと預かっていた合鍵で施錠し、ドアに「誠に勝手ながら私用により、本日は休業させていただきます」と印刷された紙を貼る。備えあれば憂いなし、だ。

階段を下りて、外に出る。「寄り道するな、か」店長がああなっ

た、ということは事故にあつたりするのだろう。どこぞのあてにならない星座占いとは大違いで、的中率は十割だ。

考え事をしながら歩いてきたからか、脇道から現れた人に気付かず、ぶつかった。

「すみません」

咄嗟に謝ると「あれ？」と聞きなれた声が上がる。紫楼だ。

「光輝くんだね？　だめだよ、ちゃんと前を見て歩かないと」

「ごめんごめん。次からは気をつけるよ」

それじゃ、と言って歩みを進めようとしたが「あのさ」と、呼び止められた。

「鼻は大丈夫？　骨折を治したのは初めてだから心配で」

「ああ、うん。折れてたことをすっかり忘れるほどの腕前だよ」

「よかった」実に嬉しそうに言う。「それじゃあね」

軽く手を振り、再び歩き出す。今のは寄り道に含まれるのか？　だとしたら、「近道、するかな」要はなるべく早く家に着けばいいのだろう。少しキツめの坂道を登ることになるが、事故に遭うよりはマシだ。

坂道を登りきるとそこに、怪しさを撒き散らしている人物が居た。黒のライダースーツを身に纏い、顔は黒のヘルメットで覆い隠している。肌の露出は一切ない。それが一人ではなく、三人もいる。怪しい人選手権でも開かれているのか？ 優勝おめでとう。

「待て」素通りしようとしたが、肩を掴まれた。「一緒に来てもらおう」

声からして、女性だ。握力が強いいため、手を振り払うことができない。

「見たい番組があるので、明日じゃだめですか？」

「ダメに決まってるだろーが！」

俺より少し小柄な、少年と思しき人物が吠えた。ポケットに手を入れたまま、睨み上げるようにしてくるが、肝心の表情は、ヘルメットに隠されているため、見る事ができない。

「待った待った、ケンもエンも、そんな風だから警戒されるんだよ？」少年よりも、頭一つ小さな少女が、俺と二人の間に割って入る。「ごめんね、二人とも、ホントはいい人なんだけど、ちょっと短気なの」

この人たちは誰なのだろうか。どちらがケンでどちらがエンなのだろうか。漢字はどう当てるのだろうか。こっちの人物は何と言うのだろうか。こんな格好でうるついていて補導されないのだろうか。この短時間で疑問だらけだ。

「黙ってるキジ」少年が言うと、「ケンが短気なのは本当だ」と、

女性が言った。

疑問が三つも解消されて、表情が緩む。少年の方がケンで、女性がエン、少女の名前はキジだ。三人の名前からして、犬、猿、雉だろう。桃太郎はどこだ？ 疑問が増えた。

「んだと、コラア！」とケンが吠え、「ほら、そういうところだよ」とエンが茶化<sup>ちやか</sup>し、「まあまあ」とキジが二人をなだめる。今の内になら逃げられる、と踏んで足音を忍ばせ、その場を過ぎ去ろうとしたが、甘かった。

「おいコラ、どこに行こうってんだ？」ゴリツ、と背中に硬いものを押し当てられる。「撃っちゃならねえとは言われてねえんだ。つまり、返事をするための口と、サインをするための手さえ残ってりゃいいってわけだ」

「ちょっと、ダメだよッ！ 誰か通ったらどうするの！」

「ケン、消音器」

キジとエンの発言を聞き、ゆっくりと両手を挙げる。背中に対してられているのは銃だろう。

「あ、あの！ おとなしくついて来てくれれば、ケンも撃たないので、そうしてもらえますか！」

脅しのつもりなのだろうが、低姿勢なうえに他人任せなため、和んだ。パニックを起こしかけていた頭から、すうっ、と熱が引いていく。



「あ」と、驚いたような声を上げる。同時に電柱の影が光り、次の瞬間、背中から銃が離れた。三人の視線が電柱に向いていることを願い、裏拳を放つ。手ごたえはあった。それだけを確認し、全力で走る。

### 三人の従者

モモが、明日はいい天気になりそうだと言うと雨が降り、いい一日になりそうだと言うと何かしらのハプニングに見舞われる。だから、「今回の仕事はびっくりするほど簡単、チョーカンタン」というセリフを鵜呑みにしてはいけなかったのだ。今になってそのことに気付いたが、完全に後の祭りだ。

地面でうつ伏せに倒れて動かないケンを見る。微かに体が上下しているため、殺されたわけではないが、どうしてそうなったのかは分からない。運が悪かったのか、それとも当たり所が悪かったのかとにかく、すぐには意識を取り戻さないだろうことだけは確かだった。

少し視線をずらすと、ぼあっ、としたまま動けないでいるキジがいる。泣き出しているんじゃないかと心配したが、現状を理解できていないようだ。説明すると取り乱す恐れがあるので、申し訳ないがそのまま置いてもらおう。

突然、ポケットに入れていた携帯電話が、その場に似つかわしくない軽快な音楽を奏で、小さく振動した。私の電話番号を知っているのは三人だけなので、自然と発信者が判明する。

「おいモモ、どこが簡単だった？」通話ボタンを押してすぐに聞かれます。「お前の言う簡単ってのはあれか？ スーパーマンがギリギリクリアできれば簡単なのか？」

「うるさい。落ち着け。何があった」

そのまま怒りに任せて延々と呪詛の言葉を喚き散らしてもよかったが、ぐつと飲み込み、深呼吸をして頭の血を下げる。

「ケンが気絶させられた」

「詳しく説明してくれる？ 結論だけ言われても訳わからん」

「まず、御手洗を見つけた」

「はあ、とモモが適当な相槌を打つ。

「ちよつと余所見よそみしてて、気付いたらケンが気絶してた」

「はあ！ とモモが声を荒げる。「なんで余所見なんかしてんだよ」

「カメラのフラッシュに驚いたんだ」

「はあ？ とモモが素っ頓狂な声を上げた。「誰か人が通ったならケンが気付くだろうが」

「言われてみればそうだ。『五感強化』の能力を持つケンが、人の接近に気付けないはずがない。そもそもおかしい所だらけだ。ヘルメットの上から殴って人を気絶させたのが、ただの腕力によるものとは思っていなかったが、たとえ当たり所が悪くても軽い脳震盪のうしんとうで済むはずだ。しかしケンは完全に意識を失っている。」

「私一人ではとてもこの疑問を解消できそうに無いので、何が起きたのかを事細かに説明する。」

「もしかしたら、御手洗の能力は『超能力者を見分ける』じゃな

いのかもしれない」数秒間の沈黙の後、そう言ってきた。「例えば、キジの能力『発火』。あれは火を操る能力でもあり、火を生み出す能力でもある。さらに、能力発動中は高温にも耐える体になるだろ？ 応用しただけでは陽炎かげろうを作って相手の視覚情報を混乱させたりもできる」

「つまり、御手洗の能力は汎用性が高いって言いたいのか？」

「その可能性が高いってだけで、そうだと決まったわけじゃない。超能力者を見分けられて、相手を気絶させられるってどんな能力だよ、と言おうとしたが、それより、というモモの言葉に遮られる。「キジはどうしてるんだ？ そんなことになってるのに泣き声の一つも聞こえないけど」

「現実が厳しすぎて放心状態」

「一応聞くが、意識はあるのか？」

ちよつと待って、と携帯電話を肩と首で支え、キジのヘルメットを取り、少し眺めてから、「目は開いてるし、素数を数えてるから、たぶん大丈夫」と報告する。

「どこが大丈夫なんだよ」

### 三人の従者（後書き）

テストは終わりました（二つの意味で）

が、これから受験なので更新ペーは遅いです。

さらにサボり気味だったせいかただでさえなかった文才がマイナスになってます。

誤字脱字がありましたら報告願います m ( ) m

## 三人の従者（2）

通話を終了した携帯電話をポケットにしまい、どうしたものかと考える。モモから、「仕事は中断してもいいし、続行してもいい」と言われたのだが、それを決めかねていたのだ。悩んでいても仕方がないので、財布から銅色の硬貨を取り出す。表が出たら御手洗を追いかけ、裏が出たらこの二人を連れて帰る。そう決めてコインを弾いた。

キーン、と甲高い金属音が響き、硬貨が真上に撥ね上げられる。くるくると回転しながら、頭上まで。やがて上昇速度が緩み、落下してきた物を手の甲で受け止め、掌で抑える。確認すると。

結果は、表だった。

ひとつため息を吐く。「面倒くせえ」思わず本音が漏れた。なら二人を連れて帰ればいいだけの話なのだが、それも面倒だ。ということ、コイントスの結果通りに動くことにする。

キジの肩を掴んで軽く揺すり、覚醒したら即座に私は、「一度しか言わないのでよく聞いてください」と早口で伝える。キジは何かを問おうとしたが、声が発せられる前に「いいですか」と念を入れると、口を半分開いたまま小さく頷いた。それから簡単に、今の状況を説明する。御手洗が逃げた事、ケンが気絶した事、それとモモと話した事を、私なりに分かりやすく簡潔にまとめつつもりだ。

「それで、これからどうしたらいいんですか？」

混乱からか私につられてか、キジも早口で話してきた。それが可

笑しくて嘔き出しそうになったが、真剣な空気を壊したく無いため、咳払いをして誤魔化する。

「キジはケンを見ていてももらえますか。このまま放っておくと色々面倒なので」

もし通行人に通報されたら病院まで迎えに行かなければならないし、その後は警察からの事情聴取があるだろう。その際に手荷物を調べられたら出てくるのは、ナイフや銃など。確実に逮捕だ。まったく、起きていても寝ていても迷惑をかけるなんて、なんて迷惑なヤツだ。

「わかりました」と言いながら首肯したが、「でも」とキジは続ける。「エンはどうするんですか？」

「御手洗を追います」そこで駆け出そうとしたが、大事なことを言い忘れていたのを思い出して、振り返る。「それと、ケンが起きてもしばらくは安静にさせてください」

キジは何故か含み笑いを浮かべながら「わかりました」と言い、ケンの体を後ろから羽交い絞めにして、茂みのほうに引きずっていった。人目につかないように配慮するだけの精神的余裕はあるようなので安心する。

御手洗を追うとは言ったものの、当てがあるわけではないので走り回る破目になっている。あいつの家にも確認のために行ったが、無駄にガラスが割れただけで何の成果も得られなかった。空き巣に来たわけではないので部屋の中は極力荒らさずにおいた。ガラスの

一枚や二枚くらい大目に見てもらえるだろう。

さて、どうしたものか。また私は考える。御手洗が家にいない理由は、自宅が安全ではないことに気付いたからだろう。実際、もし帰っていたら私と鉢合わせになっていたのだから、その洞察力は賞賛に値する。

ではどこに行ったのか、という話になるのだが、全く見当もつかない。そもそもここに来たのは単に、モモが転勤になったからであつて、御手洗の捕獲のためではない。そのため、緊急時に彼が逃走する場所も知らなければ、こんな時間に匿<sup>かくま</sup>ってくれる友人がいるのかどうかもわからない。荷解きやら生活必需品の購入やらなんやらで、この辺りの地形も覚えきっていないので、身を隠せそうな場所も知らない。完全にお手上げだ。

「お困りのようなら何か手伝おうか？」だからきつと、猫の手も借りたい、という私の妄想が脳に悪い影響を与えたのだろう。「なあ、お前さん」そうに違いない。「誰かを探してるんだろう？」でなければ、この状況をどう説明するのだ。

普通、猫は話さない。



### 三人の従者（2）（後書き）

次の話を投稿する頃には新年が明けていそうなので先に言っておきます。あけおめです（^^）

誤字脱字、日本語に違和感嫌悪感、接続詞のミス、アドバイスなどがございましたらどんどんお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7966w/>

---

閃光の王

2011年12月24日12時45分発行